

Other Line Up | HEAD AMPS

試奏チェックしたモデル以外にも、アッシュダウンには数々の製品がラインナップされている。なかでも設立当時からラインナップするABMシリーズや、マーク・キング・モデルを継承したものなど、それぞれが個性を放つ。

ABM 900 EVO III head

- 出力：500W+500W ●サイズ：610 (W) × 158 (H) × 355 (D) mm
- 重量：28kg ●価格：¥141,750

VUメーターや水色のフロント・パネル、そしてそのクリアなサウンドなど、ブランド・イメージを世間に認知させたモデルがABMシリーズ。本機は500W+500Wの出力を誇る、同シリーズの最高峰だ。

ABM 500 EVO III head

- 出力：500W (4Ω)
- サイズ：474 (W) × 134 (H) × 315 (D) mm
- 重量：14kg ●価格：¥105,000

ABMシリーズのなかでも、コンパクトなボディに500Wの出力を備えたヘッドアンプ。その操作性や見た目などからも、アッシュダウンを象徴するモデルと言える。



- ### AD600 head
- 出力：500W RMS (4Ω) ●サイズ：525 (W) × 195 (H) × 325 (D) mm
 - 重量：14kg ●価格：¥126,000

先に紹介したマーク・キングのシグネチャー・モデルMK500 headをもとに、一般のユーザーに向けてリファインされたラック・マウント・タイプのヘッドアンプ。

Interview Mark Gooday

マーク・グッディ (アッシュダウン最高責任者)



— 97年にアッシュダウンのブランドがスタートしましたが、設立当時に考えていた、ブランドのコンセプトはどんなものですか？

とても大きくて深いベース・サウンドでありつつ、独特なキャラクターとトーンを持つベース・アンプを作ることでした。加えて、私の持っている65年製



COMBO

アッシュダウンが開発するコンボ・アンプは、ヘッドアンプとキャビネット製作で培った、同社独自のノウハウが生かされている。筐体やアンプ部の設計に妥協のない、そのサウンドを実感してほしい。



コスト・ダウンを図りながらも、サブ・ハーモニクスなどアッシュダウン独自の機能を装備したコンボ・アンプ。堅牢な筐体により、しっかりとした低音を出力する。

EB 15-180 EVO II Combo

- ¥53,550
- 出力：180W (RMS)
- スピーカー：15インチ・フルライン・スピーカー
- サイズ：474 (W) × 581 (H) × 300 (D) mm
- 重量：29kg

ソリッドステートであっても、真空管アンプのようなトーンは作り出せません。

ここではブランド創設者であるマーク・グッディ氏に、アッシュダウンというブランドに対するこだわりや、考え方について話を聞いた。

翻訳：守屋智宏

のジャズ・ベースのようなオールドのバッシヴ・ベースに完全にマッチする、シンプルなものを目指していました。

—ブランドのロゴ、そしてアンプ自体のデザインには、レトロな車からの影響があると想像できるのですが、そういった工業製品からのインスピレーションはありましたか？

たしかに、ほとんどの製品におけるスタイルに関しては、新旧の車からインスピレーションを受けています。つまり、テクノロジーや素材については新しいものから、スタイルについては古いものから得ているのです。ちなみに、色合いやエンブレムはオースティン・ヒューリー 3000 のコンセプトを拝借してデザインしましたね。

—アッシュダウンは、ソリッドステートという仕様にごこだわりがあるように感じます。サウンド面において、ソリッドステートのメリットは？

ベース・アンプの多くはチューブによるブリアンプ・セクションを持つべきなのかもしれません。しかし、ソリッドステートであっても、正しく使うことで、真空管アンプのようなトーンを持つことができ、それを小さな筐体に収めることが可能となります。そ

ういった工夫や挑戦が、大きな信頼性につながっていると信じているのです。

—ベース・アンプにおける「良いサウンド」とはどんなものだと考えていますか？

温かみのあるサウンドやスピーカーの的確なコントロール、そしてダイナミクスを損なわない充分なボトムエンドです。私たちは細かい周波数帯に至るまで考慮し、小さな筐体に収められたスピーカーでも充分なサウンドが得られるように長年にわたって研究を重ねてきました。「良いサウンド」とは、キャビネット、ドライバー、イコライザー、トーン、ディストーションもしくはクリーンといった要素による、絶妙なバランスによって作られるものなのです。ですから目指すサウンドを達成したときの喜びは格別ですね。

—その「良いサウンド」を作り出すために、どういった工夫を凝らしましたか？

ウォ！ その質問に答えるには、多くの秘訣を漏らさないといけませんね(笑)。すべては25年にも及ぶ製作の経験や、多くのパーツやアイデアを試してきたことから生まれています。今日まで私がどんな工夫を重ねてきたのかは、これまでの変遷を見れば感じ取っていただけるのではないのでしょうか？